

(研究ノート)

Orlando における文学上の Masculinity の表象

渡 邊 理恵子

はじめに

Virginia Woolf (1882-1941) の *Orlando* (1938) は、伝記小説というジャンルだけでなく、17 世紀から 20 世紀初頭に渡ったイギリス文学史といった主題をもパロディ化させている。Jane de Gay は、*Orlando* の語り手や作品の序文、注釈、そして索引から、従来の文学史へのアプローチを Virginia Woolf が嘲笑しており、そこには作家が文学史をどのように捉えているかが表れていると述べた (132)。De Gay は Woolf が「歴史を書き換える」行為によって過去を把握しようとする家父長制の学者たちの試みを嘲笑し、批評家や歴史家の手法とイデオロギーの希薄さを暴露しようとすることで、私たち (読み手) が進むべき道を見つけうることを示そうとしていると指摘する (158)。

作中に描かれている文学史は決して肯定的なものばかりではない。具体的には、主人公 Orlando が直面するジェンダーイデオロギーの問題であり、これらは伝記作家の叙述を通じて提示されており、直接的に言及されているものから、小説的手法を使って間接的に示されているものまで多岐にわたる。本稿では、*Orlando* において表象された masculinity を歴史的観点から考察したい。特に Orlando が女性へと変貌した近代から、テキストで直接言及されている Orlando が出版された年月日の 1928 年 10 月 11 日までの期間に焦点を当てる。

本題に入る前に、本稿が扱う masculinity の定義について明らかにしておく。日本語訳では「男らしさ」を意味するが、研究分野によって扱われ方や定義が異なる場合が多く、曖昧な面が多い。そこで本稿では、近代における masculinity を読み解くにあたり参考にしたジョルジュ・ヴィガレロ (Georges Vigarello) 編著の『男らしさの歴史』と John Tosh の *Manliness and Masculinity in the Nineteenth-Century Britain* が取り扱っている masculinity、つまり性別による力学と社会的事情が相互に影響し合っているものとして考察する。

近代社会における Masculinity と Orlando

この作品の物語のプロットは、1 人の男性（のちに女性へと転換）が文学という言葉の力で名声を獲得するまでの過程であるが、Woolf の関心は文学史や文学者の諸問題だけではなく、女性と執筆活動における関連性にも及んでいる。*A Room of One's Own* (1929) では、Shakespeare に妹がいたらという仮定から女性を書くことの難しさについて議論を展開させているが、*Orlando* でもこのテーマは無視できず、女性へと変化した後の Orlando が直面するジェンダーイデオロギーの問題と重ね合わされている。Orlando は男性だった頃から作品を描き続けており、25 歳になるまでに四十七篇もの演劇や史劇、ロマンスや詩を書いた。その後、当時書き溜めていた作品のひとつ “the Death of Hercules” を当時文壇で名の知れていた Nicholas Greene に嘲笑され、しばらく筆を折ることとなったものの創作活動は継続している。女性として再び London へ戻った後も、慌ただしい屋敷の生活に悩まされながらも二十六篇もの作品を書き、それでも自己成長の真っ只中であると自覚し、知的交流を通して文学を磨こうとしていた。

本稿の主題である masculinity が見られるのは、この知的交流が行われている四章である。Orlando の語り手は、性の流動性を認識しながら、その正体を Orlando の私生活を通して読者に説明を試みている。例えば、身体的性と嘸み合わない主人公の行動について Gaura Narayan が指摘したのは、Orlando が Nell と関わっているところに彼女の潜在的な masculinity が刺激されたといったポイントである。これによって Orlando が女性であると打ち明けたことで、ジェンダーのパフォーマンスを脇に置くことができた指摘する (128)。これはいわゆる伝記作家が語る “different though the sexes are, they intermix” (132) の一例であり、性の流動性や両性具有性の具体的様相を説明している。

ここで物語において言及されている masculinity が一体どのようなものであるか、Orlando の女性同士の交流に至るまでの過程を踏まえた上で見ていきたい。Orlando は Greene の一件で懲りずに、偉大な作家に対しての尊敬の念を抱き続けていた。彼女は機知を求め、社交界に参加し Old Madame du Deffand (1696-1780) やその友人たちとの交流をする。その後に出会った Alexander Pope (1688-1744) との面会は、偉大な作家を崇拝する Orlando にとっては念

願叶った機会であったが、間も無くその幻想から目を覚めることとなる。Pope らが説く性の規範は、男性性の優位性を維持させるためのものであり、有害な男らしさが示されている。その流れを中断させる形で、Orlando が Pope のお茶に、うっかりと砂糖を入れる (148-49)。この動作は歴史に裏打ちされた masculinity の表象が見られる。砂糖は 18 世までは特権的階級のステイタスを表しており、その生産はイギリス領カリブ海域のプランテーションで栽培され輸入されていた。また作中には砂糖が Fly Loo というカードゲームで、ハエがどの砂糖に止まるかという賭けの場面でも登場する。Orlando らの所属している社会的地位の高さが表現されている。

近代の男らしさは、中世のものとはその相貌は異なる。ヴィガレロは、近代的な男らしさは、暴力や争いなどといった伝統的なものではなく、繊細さや上品さに見られたと指摘する。これらは「男らしさの喪失」と言われていたが、優越性や支配は健在であり、女性たちは男性に従うものであったと続けており、男らしさの本質は変わっておらず男女間の優越性の勾配は依然と健在である。Orlando でもそれに準ずる masculinity が見られる。伝記作家は Jonathan Swift の *Gulliver's Travels* の第四編を引用し、その内容を受けた Orlando の反応である。

Nothing can be plainer than that violent man. He is so coarse and yet so clean; so brutal, yet so kind; scorns the whole world, yet talks baby language to a girl, and will die, can we doubt it? in a madhouse. (147)

一方では蔑み、一方では優遇するという女性に対する暴力と慈愛のギャップの結果に精神病院で死を迎えるだろうと、Orlando とこの語り手は男性作家の語るものが欺瞞であり、この男尊女卑が迎える最終目的地を見抜いている。以前の Orlando は、船上で船員に助けられる自分を客観視することで、自身の性を認識するだけでなく、その助けによる高揚感を正直に語っていたが、この気付きには Orlando の求めた自己成長が達成されている。

またヴィガレロは 18 世紀の男らしさの変遷について議論を続ける。著者はヨーロッパの人々が未開の土地へ侵入し、未開の土地の「発見」と先住民との

関わりをもったことで、彼らの男らしさの規範が変わったという。啓蒙主義は未開人の文明をヨーロッパの文明と比較して軽く考えていたが、当時の衛生学者たちは活力を失ったヨーロッパ人と自由で誇り高き未開人とを、鏡ないし反鏡として言葉を発しており、男らしさが複雑化、もしくは豊穣化してきた。それは、欧州の出生率の低下とヨーロッパ人の体系が劣化してきた危機感と、未開の土地の剛健な身体との比較を通じてより顕著な形で登場している。この論はヨーロッパ全土を網羅した調査によるものであり、細かな事情は国ごとにこととなる。John Tosh は England における 1750 年代から 1800 年代の imperialism と masculinity について、慎重に議論を展開している。彼はここで、歴史研究において England の移民が、他国の移民ほど masculinity と紐づけられて語られていないことを指摘した上で、移民の masculine の現れについて、いくつか可能性を提示する。一つ目は広大な土地に対する支配意識を持つこと、二つ目は経済的に自立することで早く成人男性となれる、ひいては父親の権威からの自主性を示すことができること、そして三つ目に自身の体力の証明が可能であることである。またこれは Gold Rush 発生までの限定的な期間の話題であり、1880 年代からの New imperialism ではまた男らしさの系統がわずかに変容する。それは New imperialism 時代において、帝国は外国の脅威にさらされていると広く信じられており、男らしさの強化が求められた。そのため、1830 年代から 1860 年代にかけてのパブリックスクールでは、男らしさを作り上げることを目的とした、男子教育が施されていた。また Tosh は、植民地におけるホモソーシャルな文化が人々を惹きつけたという話題にふれ、これに魅力を感じていたのが、ホモソーシャルな空間に馴染みのあったパブリックスクールの生徒であったと、ジェンダーの観点からも masculinity を考察した (197-8)。これらは中流階級、および上流階級の男性に限った話であるが、Orlando にはその時代の言説を裏付けるように、文学作品の引用が登場する。Pope の *The Rape of the Lock* (1712, 1714) や *The Spectator* からの引用は、男性が女性に対して一方的に抱いている偏見を助長させた性差別的意味合いが強い。Orlando が Pope のお茶に砂糖を落とし、彼がそれから侮辱を感じ取ったのは、Orlando が彼の男らしさを二つの方法で損なわせたからである。一つは彼の話を遮ったこと、そしてもう一つは彼の喪失された男らしさを刺激したことである。Orlando と

語り手は意識的に家父長制に保守的な作家の思想の masculinity の虚構性を突き、また一方で無意識的に彼らの masculinity の欠陥を触発したのである。

近代文芸における男性性 — 文芸批評家 Sir Nicholas Greene と Masculinity

オックスフォード大学で英文科が創設されたのは一八九四年であり、世界的に見ても英文学を学問として体系化し高等教育に組み込まれたのは二十世紀近くになってからであったが、文学作品や作家に対する意識はもっと以前から見られているのは自明である。こうした過去の文学に対する意識は昔だけのものでもなく現代でも共通して存在している。例えば Orlando は Elizabethan を生き、作家の Shakespeare を目撃しただけであるにもかかわらず彼を偉大な作家として認識し、二十世紀に入った後もそのように考え続けた。また Nicholas Greene が流行の文学的傾向を嘆く時、実際に目にして文学議論を重ねてきた Elizabethan の作家たちを引き合いに出すが、Edwardian 前後で再登場したさいにもこの懐古を繰り返す。これらは過去の文学に対する意識の表れである。もちろん登場人物による文学作品の名前や作家、また文学的傾向の言及は、その場面の時代性を表現する役割だけでなく、読者の文学体験と連動しており、彼らが経験していないはずの過去の感覚をもたらす効果を發揮している。詩集 “The Oak Tree” の出版が決まり、Orlando が Shelmerdine からの電報を待っている間に本屋で過去の作家たちを思い浮かべる場面には、過去の文学に対する意識がより顕著に表現されている。彼女は当時の本屋で粗悪な印刷物が多く並べられていることに驚く。そこで Shakespeare や Milton の実際の原稿を見たという情報と、半クラウンで販売されている彼らの本の描写は、Orlando の記憶と Orlando の物語を追ってきた読者の記憶とが一致しており、懐古的雰囲気をもたらしている。

作中の masculinity は、英語という武器で自身の死後にも通用する作家になりたいという Orlando が抱いていた文学的野心が、彼（彼女）の先祖の、領土拡大や異教徒ととの戦争と同じ文脈で登場しており、比較的明瞭な形で読み取れる。また史実の文学作品に関係する masculinity については、フェミニズム的視点からも読み取れる。作中で描写されている性規範や、実際に引用されている文学には、男女間のヘゲモニーがあり、作中では軽蔑と皮肉として提供さ

れている。また作中では文学を取り巻く文芸に関係する masculinity も、作中では暴かれている。物語後半で Sir の称号を得た Nicholas Greene は、そのモデルである Robert Greene の史実通り作家兼批評家であり、作中では文芸批評の擬人化の役割を担っている。よって、初登場時のみずばらしく、また下品で野暮ったい姿が、19 世紀にはステッキ片手にシルクハットを被った裕福そうな見た目へと変貌を遂げる描写には、文芸の社会的地位の劇的変化が現れている。時代が進むにつれ権威へと変化した Greene の挙げた、時代を表す作家の名前が以下である。

‘ah! my dear lady, the great days of literature are over. Marlowe, Shakespeare, Ben Jonson-those were the giants. Dryden, Pope, Addison-those were the heroes. All, all are dead now. And whom have they left us? Tennyson, Browning, Carlyle!’-he threw an immense amount of scorn into his voice. (193)

Greene は 19 世紀の文学的傾向と出版事情を嘆くために、時代を象徴する作家の名前を用いた。上記で挙げられている作家たちは時代を表すだけでなく、masculinity の特徴がよく見られる作家である。もちろん作家によって、家父長制を肯定や、僧侶、また homosexuality などといった男らしさの性質は異なるが、Tennyson、Browning、Carlyle らの masculinity は典型的な masculinity の特徴をもった作家として議論されている。

また一方で、この作品は実際に活躍した女性作家への言及が先に述べた作家に比べ極端に少ない。19 世紀は散文の時代であり、また女性の職業作家が台頭した時代でもある。唯一直接言及されているのは Christina Rossetti (1830-94) のみだが名前が一度登場しただけである。Charlotte Bronte (1816-55) や Elizabeth Barrett Browning (1806-61)、Mary Shelly (1797-1851)、また時代を少し遡って Jane Austen (1775-1817) などの女性作家については不自然なほどに無視されている。間接的に登場するのは George Eliot の存在だが、‘four great names’ (201) という言及のみで終わらせており、さらに 19 世紀の出版がいかに退屈なものであるかという文脈で登場する。実際のマイナーな批評家や歴史家を彷彿とさせる姓の羅列や、*Orlando* の序にて言及されている偉大な作家たちへの

言及から、作品は恣意的に女性作家への話題を避けていると考えうる。De Gay はこういった作品の方針について、「女性作家を無視し、家父長制をパッケージ化させることで、フィクションの戦略を使用している」と、メタ的な視点から考察している (147)。あえて女性作家の名前を排除することで、異質さがかえって目立つという効果を利用した。またメタ的な視点で考慮すると、性別に関わる内容に触れないことで、性別で Orlando が分類されるのを避ける必要があったのではないかと考える。性の流動性だけでなく両性具有性を持つこの主人公は、この後に創作で成功を収める。そこで偉大な女性作家を扱わず無視することで、Orlando を女性作家の系譜として並べられることを免れている。

Orlando の創作意欲と masculinity

最後に Orlando の作品である詩集 “The Oak Tree” と masculinity の関係性を考察する。作中では 19 世紀の暗雲が London の空上を覆い、Orlando は時代の変化に敏感に気付き、テキスト上で言われている “the spirit of the age” (169) を感じ取る。彼女は書くことでその時代に追従しようとしたが、この時すでに 30 歳を超えていたため、時代に合わせる事が困難であるという。彼女はそこで、実生活にて時代の流れに身を任せることとなる。彼女は “lean upon” できる相手を求めている過程で Shelmerdine と出会い電撃的に結婚をする。Shelmerdine との結婚式では、風が吹き、教会の鐘が鳴るなどの自然と心象が重ね合わされた描写から Emily Brontë (1818-48) の *Wuthering Heights* (1847) における Moor の自然描写や主人公の心象風景を彷彿とさせるが、両作品の主人公が迎えた結末は正反対である。Catherine は精神的抑圧のない自由を求めたが、Edgar Linton との結婚が Heathcliff との関係悪化に繋がり身体と精神の束縛を受けることとなる。一方、Orlando は Shelmerdine との婚姻と結婚指輪が彼女の執筆を後押しすることとなったことは興味深い。Orlando は従来のジェンダー規範に倣った行動を取ったことで、精神的な安定が図れた。これは重要な出来事ではあるが、作中では Shelmerdine との初対面から深い関係になるまでの展開が軽々しく取り上げられている。Shelmerdine との邂逅は最初から Victorian の恋愛小説を模倣したようなロマンスから始まり、お互いの素性を知らないまま突発的に恋に落ちる。こうしたパロディ化された、ある種の実験

的な物語展開によって、取るに足らない出来事として扱われている理由は、Orlando は詩人であるからだ。書き続けるためには不可欠だが、物語の主軸はあくまで創作活動である。

また Catherine との比較において、両者にはそれぞれ当時の社会的背景のわずかな違いが見られる。Tosh は 19 世紀後半にフェミニストの論争が大きくなり、未婚の女性は以前よりも大きな自由を得ることができたことを指摘する(205)。もちろん流行の作家によっては家父長制が支持されることもあったが、女性は一人暮らし、あるいは女性だけでの家庭暮らし、また家庭外の仕事などを自分で選択し、場合によってはその選択の放棄ができた。このいわゆる結婚離れは、労働者階級や中産階級の下層部にはあてはまらなかったが、永久的に貴族の身分を保持している Orlando にとって、結婚が本業に良い影響を与えたのはこうした背景があるかもしれない。

では、彼女の作品 “The Oak Tree” の masculinity については何がいえようか。私はこの作品が埋められなかった点に、masculinity の扱われ方が出ていると考える。Orlando は、この作品が出版されたさいに “the triumph of the age” を実感したが、受けた評価はそれ以上であり、この作品は重版され ‘The Burdett Coutts’ Memorial Prize’ を獲得する。しかし語り手はその高揚感の危うさにも言及している。以下の引用は成功に伴う名声についてである。

... we must snatch space to remark how discomposing it is for her biographer that this culmination to which the whole book moved, this peroration with which the book was to end, should be dashed from us on a laugh casually like this. ...
(215)

作家として Orlando は文学的成功のみで終わっていない。彼女はこの名声の恩恵を想像力の起源である大地に還元するために、カシの木の根本に本を埋めるという象徴的儀式を行ったが中断し、結局そのままにしておく。そして文学作品を恋人たちの語らいといった、私的で秘めやかなものとして留めておく。この文学的成功や名声を masculinity の覇権的なものを、埋葬をしないという行為によって勝ち逃げを防ぎ、歴史の連続性と文学の永続性を表現しているよう

に解釈できるのである。

結び

Orlando は 1 人の詩人が紆余曲折を経て、作品を生み出すまでの過程を追っている。作中では主人公の性別の転換だけでなく挫折や精神的成長が描かれているが、彼（彼女）の性質は大きく変わらない。Orlando は “The Oak Tree” の原稿を、何度も時代と舞台が移動してもずっと持ち続けていた。そして主人公の姿勢は変わらないまま、時代が進み、人と時代精神の巡り合わせで評価を受けている。

本稿では歴史的な観点で作中に表象された masculinity を探った。単純に言及されているものの他に、主人公の書く行為とジェンダーとが影響し合う様子が Orlando の実際の創作過程に現れている。こうした点から masculinity が読み取れることから、このテーマが作品の包括する問題意識と密接に関わっていると言える。また、この観点以外で、両性具有性、また物語展開や言葉というレベルでも、masculinity の視点で物語を読むことができるかもしれない。

引用文献

- De Gay, Jane. “Rewriting Literary History in Orlando.” *Virginia Woolf's Novels and the Literary Past*. Edinburgh UP, 2007, pp.132-59.
- Narayan, Gaura. “Sex and Literary History in Orlando.” *Virginia Woolf and Heritage*, edited by Jane de Gay et al., Liverpool UP, 2017, pp.128-33.
- Tosh, John. *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain*. Pearson Longman. 2005
- Woolf, Virginia. *Orlando: a biography*. Penguin, 2019
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Penguin, 2019
- シドニー・W・ミンツ『甘さと権力 砂糖が語る近代史』川北稔、和田光弘訳、筑摩書房、2021 年。
- ジョルジュ・ヴィガレロ「近代的男らしさ 確信と問題」寺田元一訳『男らしさの歴史 I』鷺見洋一監訳、藤原書店、2016 年、pp.271-284.